美郷大使鼎談

美郷の将来を担う子どもたちに伝えたいこと
～たくましい大人へのステップとして～

7月30日に美郷町公民館で、美郷大使鼎談「美郷の将来を担う子どもたちに伝えたいこと～たくましい大人へのステップとして～」が開催され、松田町長を進行役に、美郷大使である町田睿さん、佐々木毅さん、永田萠さんが意見交換を行いました。美郷大使からどんな提言があったのかー、鼎談の内容をご紹介します。（一部抜粋および編集）

現在の日本の子どもたちについて

町田大使（以下、町田）：私たちが子どもの頃と比べると、今の子どもたちはある意味では大変気の毒な環境にあります。それは少子化が進んでいることです。子どもの数が少ないため、両親、そのまた両親からも可愛がられる。やや可愛がられすぎて、発育が十分ではないという問題があるのではないでしょうか。中国でも一人っ子政策で「小皇帝」というようなことを言われていますが、同じ問題を実は日本の方が先に抱えていると思います。そういう意味で、ひ弱な子どもが多いのではないかと私は心配しています。

永田大使（以下、永田）：子どもと一緒に絵を描くと、低学年ほど絵が面白く、高学年になるほどつまらなくなります。時々、絵画コンクールで審査員を務めることがありますが、一等賞や金賞などを獲るのは、小学校低学年か園児です。これは圧倒的に絵が素晴らしいんですね。なぜ年齢が重なるほど絵がつまらなくなるのか。それは、子どもの想像力がどんどん枯れるというか、大きくなるにつれ発想力が弱まることだと思います。これは、私たち大人が構成する社会の責任かもしれません。つい「当たり前であれ」と教えがちですが、きちんと社会人の役割を果たすことを教えながら、「当たり前だけが全てじゃないよ」ということを教える大人もいていいんじゃないかと実感しています。天才的な発想や社会を変えるユニークな行動力は、ちょっと違うというところから生まれてきますので、変わることを恐れない、変わっていることに不安を感じない、そういう子どもらしい素朴なたくましさが、やや日本の子どもに欠けているのではないかという危惧を感じています。

佐々木大使（以下、佐々木）：今の子どもは本当に忙しそうです。自分が子どもの頃は暇で暇で、することがなかった。そういう環境だと、フッと興味も湧くし、友達との遊びから色んな経験をするということもありました。今は色んなものが供給過剰になっていて、「ああしろ、こうしろ、これもある、あれもある」となり過ぎるのではないでしょうか。あらゆる物があるけど、何があるのかよく分からない。今から数十年前は本屋もゲームもテレビもあるわけではなく、細々とラジオが聞こえてくる程度ですから、ある意味、本人が何か意欲を持つ以外には何も答えが出てこない。ところが今は何もしなくても色々なものが押し寄せて来て、あちこちに小出しに関心を振り向けて、結果として個性が無いというようなことになっているのではないかと思いました。

学校教育はどんな役割を担うべきか

永田：私は「学校は行くべき」と絶対に思っています。昔で言うところの「読み、書き、そろばん」を教える場が「学校」ですから、1日でも休んだら損だと思っています。学校が好きということはすごく重要で、「今日行くの嫌だなあ」と、目を覚ました瞬間に思うのはとても不幸ですね。学ぶということは、基礎がしっかりしていなければ、どんなに上に知識を積み重ねても不安定なものになります。学校が嫌にならないような環境を作り、基礎をいかに教え、伝えるのか。また、ほとんどの子どもが学校に行けるというこの幸せな状況を、子どもに認識させないといけないとも思います。私たちの世代には、学びたくても学校に行けない人が何人かいました。ほとんどの子どもが大学に行ける日本の学校教育の素晴らしさ、

それがどんなにありがたいものかを、小さいうちから教えなければならないのではないかと思います。

佐々木：学校教育は、大勢の若者を一つに集めて、そこで大量教育と言っては悪いですが、大勢の中で教育するという点に特徴があります。その意味では、お互いが学びあうという関係を非常に重要な要素として含んでいます。色んな形、色んな機会で何かに触るようにして刺激しあうことを試しているというのが、教育の実態だと思うんですね。生徒と先生、周りの友達ともうまく接点が出来て、出会いがあって、ひらめきとでも言うか、ある意味「奇跡」というと語弊があるかも知れませんが、ある種の意識の変化が起きることがあります。本人が何か思わない限りは、外からいくら注入しても、こっちから入ってこっちから抜けていくという世界から自由になれない。入れたものが本人の中で止まって発酵して、色んな形で活動するまでになると、教育に携わる者は、「やってきて良かった」と感じるのだろうと思います。

町田：今の学校教育の非常に難しいところは、「IT化が進んだ」ということではないかと思います。子どもも大人もスマートフォンをいじくり回し、算数も国語も端末をたたくとすぐに答えが出る。便利になりすぎ、現実と空想の境目がはっきりしないような時代になっているということです。例えば可愛がっていたウサギや家畜が死んだときにはどういう辛い思いをするのか、そういう実体験が非常に乏しくなっているのではないかと思います。子どもには出来るだけリアルな実体験をさせてほしいものだと思います。

学校と家庭、地域の関係

永田：学校は学校、家庭は家庭と考えると、自分たちの出来ないことをお互いになすりつけると言いますか、そういう傾向になりがちです。「学校に任せておけばいい」とか「そんなことは家庭の責任でしょう」ということではなく、子どもにとって身近な大人の一人ひとりが責任を果たしていかなければならないと思います。

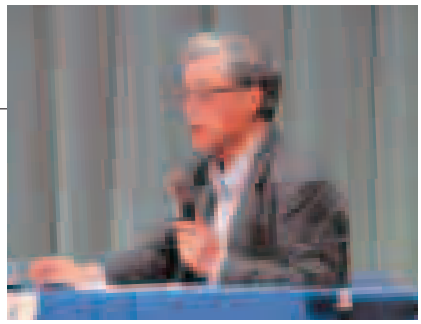
佐々木：そっちがこっちがという話をしたら、これはもういい結果は生まれないと思います。私の友人が私立大学の学長でしたが、先生と保護者の関係の難しさが今の日本の学校の、非常に大きな問題になっていると繰り返し言っていました。お互いがお互いに色んなことを主張し合うということによって使われる膨大なエネルギーは、出来るだけ少なくする努力が大事です。保護者と先生が協力しながら、「色んな可能性のある子どもたちを生み出すんだ」とスクラムを組むことが一番大事ではないでしょうか。結局、その恩恵に預かるのは子どもたちですから。

町長：学校現場と家庭がスクラムを組んで情報を共有し、そのうえで学校教育が本来発揮するべき「学ぶことの楽しさ」を伝えることが重要ですね。学校や家庭、或いは地域にいる大人の責任についてご意見をいただければ。

佐々木：子どもには、それなりにある種の自信を持つような人間になってもらいたいというのが基本だろうと思います。まだ若いですから、ささやかな種火のようなものだと思いますが、運動、スポーツ、絵、或いは勉強かもしれないし、色々あっていいと思います。AであれBであれCであれ、友達の間で「この子はこういうことが出来る」と評価されていて、それで本人が自信を持つようになるということは、やはり学校では大事なことです。学校は、ト

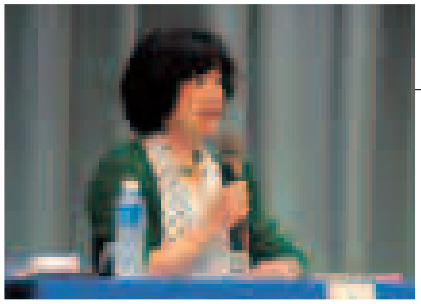
町田　睿（まちだ　さとる）さん

昭和13年、旧千屋村生まれ。東京大学法学部を卒業後、富士銀行に入行、同行常務取締役を経て、平成7年に荘内銀行代表取締役頭取。平成21年から北都銀行取締役会長ならびにフィデアホールディングス取締役会議長。平成24年4月東北公益文化大学学長に就任。秋田市在住。



佐々木毅（ささき　たけし）さん

昭和17年、旧千屋村生まれ。昭和48年に東京大学で法学博士の学位を取得。東京大学法学部教授、同大大学院法学政治学研究科長兼法学部長などを経て、平成13年に東京大学総長に就任。平成17年、紫綬褒章を受章。現在、学習院大学法学部教授、日本学士院会員。東京都在住。



永田　萠（ながた　もえ）さん

昭和24年、兵庫県生まれ。絵本作家。花と妖精をテーマとした夢あふれる作風で、絵本やエッセイなど140冊を超える著書を出版。平成21年には美郷町学友館で特別展を開催、合併5周年記念式典では記念講演を行うなど美郷町とのゆかりも深い。元兵庫県教育委員長。京都府在住。